「海洋文学」か「海の文学」か

—— 東アジア現代文学における女性作家の挑戦

Masahiko NISHI (西成彦 : Honored Professor of Ritsumeikan University)

✉ mas-nis@nifty.com

(日本) 立命館大学名誉教授。比較文学。『外地巡礼——「越境的」日本語文学論』(東京 : みすず書房, 2018)、『バイリンガルな夢と憂鬱』(京都 : 人文書院, 2014)、『胸さわぎの鵜外』(京都 : 人文書院, 2013)、『[新編] 森のゲリラ 宮澤賢治』(東京 : 平凡社, 2004)、『ラフカディオ・ハーンの耳』(東京 : 岩波書店, 1998)、"Miyazawa Kenji and Global Justice" (ARTISTIC VAGABONDAGE AND NEW UTOPIAN PROJECTS, ed. Shigemitsu INAGA, Kyoto : International Research Center for Japanese Studies, 2011)、"Frontiers and Borderlands of Japanese (Language) Literature" (THE PROCEEDINGS OF THE EAST ASIAN-SOUTH AMERICAN COMPARATIVE LITERATURE WORKSHOP 2007, Eighteenth Congress of the International Comparative Literature Association, Institute for International Understanding, Osaka : Tezukayama Gakuin University, 2008) など。

Maritime Literature or Sea Literature

: An Attempt at Reconsideration of East Asian Literature

Most of the ancient Japanophone letters focused on idyllic seascapes, life on the seashore, or the lives people led in seaside villages, clearly because the Japanese archipelago is surrounded by ocean. Drawing on this body of literature, the legend of Urashima and the original verses of one of the wartime Japanese nationalistic hymns, "Umi Yukaba," were both dexterously re-imagined in modern Japan.

On the other hand, it goes without saying that modern Japanese literature owes much to Western masterpieces of maritime literature which are largely modeled on The Odyssey, such as Robinson Crusoe and *Vingt Mille Lieux Sous Les Mers*, all of which not only reflected but also furthered in their own ways the imperialistic ambition of the Western powers. This may be the reason why modern Japanese maritime literature have focused mainly on motifs surrounding navigators' adventures and have neglected fisher-(wo)men's and salt-makers' lives, except for the strand of proletarian literature which criticizes the harsh exploitation seen in the fishing industry.

In this context, it is important to consider the work of Shaman Rapogan, one of the leading writers and activists in the field of Taiwanese aboriginal literature and an advocate of alternative sea (not maritime) literature, which is arguably far more in harmony with environmental concerns. In this light, the purpose of this paper is to evaluate the challenge to mainstream maritime literature generated by the contemporary Japanese female writers Michiko ISHIMURE and Yūko TSUSHIMA, and to sketch a history of East Asian "sea" literature.

Keywords Maritime Literature(海洋文学), Sea Literature(海の文学), Aborigine Literature(原住民文学), Environmentalism(環境論)

1 はじめに

2019年10月に台湾の台湾国立大学で開かれたシンポジウムで、私は津島佑子(1947-2016)と石牟礼道子(1927-2018)という日本の戦後文学を代表する二人の女性作家に対する哀悼とともに、もう一人、「万葉学者」の丸山隆司(1948-2015)さんに対する追悼の意味もこめたいと思っていた。発表のタイトルを、《海の文学~「うみゆかば」から「大海に生きる夢」まで~》としたのには、そうした思いがあったからだ。

丸山さんにお目にかかったのは、「知里幸恵生誕百年」を記念した巡回展を立命館大学の国際平和ミュージアムでお引き受けしたタイミング(2004年5月)を捉え、同じ学内の国際言語文化研究所で「春季連続シンポジウム：先住民という言葉に内実を与えるために」を企画し、四回連続のなかの「シンポジウムIII <国語学とアイヌ語学の分岐点——金田一京助と知里幸恵>」(同年5月30日開催)に安田敏明さん、佐藤＝ロスベアグ・奈奈さんとともにパネラーとして登壇いただいたのが最初だった。

そもそも丸山さんのご出身は京都だとのことで、東京都立大で古代文学を学ばれた後、北海道の藤女子大学で教鞭をとられていたのだが、その日以来、私と丸山先生は意気投合して、丸山さんが所属されていた藤女子大学の紀要『国文学雑誌』も、ご自身が書かれた号は、欠かさず送っていただけようになった。

丸山さんの単なる古代文学者に終わらないスケールの大きさは、『<アイヌ学>の誕生~金田一と知里と~』(2002)からもわかるように、帝国日本の植民地経営や植民地学の創設が、「植民地=周縁」の諸文化のなかに「日本の古代」に見るところにあるとの認識をもって、「古代文学研究」を「植民地主義研究」へと接続しようという固い覚悟に基づくものであった。金田一京助の「ユーカラ研究」がどこか「滅び行く文化」をめぐる学問の確立であった以上に、その「ユーカラ翻訳」が「擬似的な古代日本語への翻訳」(「『神様にも劣らぬひと、しばしおちつきたまへ。毒ぐしをば、われら汝より抜かんとするなり』／云ひたりけれど、毒はげしく、きゝもて来るがゆゑ、魚の臨終のはためきを、われまねしむたりけり」——「虎杖丸」より¹)であったことをこそ、丸山さんは問題視した。たしかにそれは『アイヌ神謡集』(1923)の知里幸恵(1903-22)の訳業(「『銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに』と云ふ歌を私は歌ひながら流に沿つて下り…」)と比べても大幅な後退である。

丸山さんはポストコロニアリズムをくぐり抜けた「万葉学者」だった。であればこそ、お送りいただいた紀要のなかでもフェミニズムを踏まえた「『大日本帝国』への「行路」——『暗夜行路』をめぐる——」²や、2010年5月に札幌で開かれたシンポジウム「台湾の日本語文学——1930年代を中心に——」で読み上げられたという「短歌と異族—台湾—」³

1 金田一京助(採集並びに訳)『アイヌ叙事詩／ユーカラ』(岩波文庫、1936)、p.241.

2 丸山隆司「『大日本帝国』への「行路」——『暗夜行路』をめぐる——」(『国文学雑誌』72号、藤女子大学国語国文学会、2005)、pp.95-111.

や「霧社蜂起事件」をめぐる言説(ディスクール)(1)⁴などは、ピーター・ヒュームやホミ・バーバを題辭に引くなど、『万葉集』研究としては型破りな、ポストコロニアル批評の実践であった。

しかし、亡くなられるまでの10年間、丸山さんが最も力を注がれたのは、敗戦前の日本では「第二国歌」とさえみなされ、広く歌われた「海ゆかば」をめぐる歴史研究だった。そして、こつこつと大学の紀要に書き溜めたものを、『海ゆかば——万葉と近代——』(2011)という一冊にまとめられた。

「海ゆかば水漬く屍」という詩句が、いわゆる「権威に媚びる祝福歌」の伝統に属するレトリックでしかなく、「水に浮く戦死者」そのものをイメージさせる単なるグロテスク・リアリズムなどでないことは言うまでもない。

そもそも大伴家持の歌は、『万葉集』の「巻十八」に収められ、聖武天皇が大仏建立に必要な金を調達するのに躍起であったころ、陸奥国からそれが提供されたことに対する「賀歌」として詠まれている。「大君」を称える歌ということで言えば、後の「わが君は千代に八千代に・・・」(『古今和歌集』巻七)へと受け継がれるひとつの系譜に属しているということになる。

ただ、『万葉集』には「乞食人が詠ふ歌」として「[前略]大君に 我れは仕へむ 我が角はみ笠のはやし 我が耳は み墨の埴 我が目らは 真澄の鏡 我が爪は み弓の弓弭 我が毛らは 身筆のはやし 我が皮は み箱の皮に 我が肉は み膾はやし 我が肝も み膾はやし 我が脰は み塩のはやし 老いたる奴 我が身一つに 七重花咲く 八重花咲くと 申しはやさね 申しはやさね」(巻十六)などという鹿がみずからを「大君」に捧げるといふ壮絶な歌もある。

しかし、そうしたある種のレトリックであったものを、日中戦争以降の日本は、肉弾戦の手本として、さらには特攻や集団自決を正当化する論理として濫用したのだった。

2 「万葉と近代」

丸山隆司さんの『海ゆかば——万葉と近代——』は、1937年に「発明」された唱歌「海ゆかば」が、戦争の泥沼化とともに人口に膾炙していったさまを徹底的に追いかけた渾身の一冊だが、通読するなかで、とりわけ瞠目させられたのは、1945年の8月、加計呂麻島で島尾敏雄(1917-86)と大平ミホ(1919-2007)とのあいだに交わされた「やまとことば」のなかに、『記紀』や『万葉集』の響きと香りをかぎとる古代文学者ならではの感性の鋭さ

3 丸山隆司「短歌と異族—台湾—」(『国文学雑誌』87号, 2012), pp.31-51.

4 丸山隆司「霧社蜂起事件」をめぐる言説(ディスクール)(1) (『国文学雑誌』91・92合併号, 2015), pp.30-40.

だった。

島尾ミホ『海辺の生と死』(1974)に収められた「その夜」は、あやうく「水漬く屍」になる寸前にあった「島尾隊長」に向かって「古代日本語」を駆使して訴えかけようとするミホと、奄美の方言で語りかけようとするミホの二つの姿が二重写しになっていて、何ともせつない。

終戦の前々日、昭和二十年八月十三日は旧暦の文月六日、七夕さまの前の晩で星のきれいな宵でした。／私は島尾部隊の隊長さまを待ち侘びつつ「わがせこが来べき宵なりささがにのくものふるまいかねてしるしも」などと口遊みながら、行燈に掛けた薄衣を通して揺れる仄かな灯火の明りをたよりに、明るく早晩の星祭のためにと、短冊や和紙にうたを書いておりました。その中には隊長さまへお捧げしたものもありました。

チドリ【千鳥】ヤ ハマチドリ【浜千鳥】ヤ
スガ【何故】ウラヤ【お前は】ナキュル【泣き居る】
カナガ【君が】ウモカゲヌ【面影の】
タチドゥ【立つ故に】ナキュル【泣き居る】
カナガ【君が】ウモカゲヤ【面影は】
タチマサリ【立ち増さり】マサリ【増さり】
タチマサリ【立ち増さり】マサリ【増さり】
シュヤヌケブシ【塩焼小屋の煙】
加那恋ふは塩焼小屋の煙の如く吾が胸うちに絶ゆる間もなし⁵

「塩焼」といえば、『万葉集』のなかでは恋い焦がれる感情をあらわす常套イメージなのは私でも知っている。「しかの海女の煙焼きたてて焼く塩の辛き恋をも吾はするかな」(巻十一)というわけだ。

しかもミホが触れている「わがせこが来べき宵なりささがにの」の歌は、『古今和歌集』に収められている衣通姫(允恭天皇に寵愛されたとされる「そとおひめ」)の歌で、「ささがに(=ささがね)」は次の「くも=蜘蛛」にかかる枕詞で、「蜘蛛が巣を張るのは恋人が来るしるしだ」という迷信を踏まえたものらしい(巻十四)。それは『允恭紀』にもすでに拾われていた。

そして、丸山隆司は、「加那恋ふは…」の歌が「万葉調」⁶であることの傍証として、「ジイドの「狭き門」を読み返す」というハイカラな女性であったミホが、七月十四日には、「以前は外国の小説を夢中になつて読みましたが、近頃は気持ちが寄つていきません。近頃「古事記」や「万葉集」には涙する程です。そして父に和歌のことを教へて貰はうとするやうになりました。いい歌をあなたにお捧げしたいのです」⁷と書いてくるようになって

⁵ 島尾ミホ『海辺の生と死』(中公文庫、1987)、pp.179-180.

⁶ 丸山隆司『海ゆかば——万葉と近代——』(アヴァン札幌、2011)、p.242.

⁷ 島尾敏雄・ミホ『愛の往復書簡』(中公選書、2017、pp.207-208。(初出は「愛の往復書簡——昭和二十年一月から八

いたことをあげている。

「恋ひて死なんと」は、『万葉集』に見られる恋歌の常套表現である⁸と切り切れるだけの丸山さん故に、「その死が犬死ではなく、なんらかの栄光に与ることができるのか、つまり、共同性に転位できるのか。そういうとき「海ゆかば」がうたわれ／うたわされたのではなかったか⁹」と論考を締めくくることができた。

古代には「大君」を言祝ぐだけだった歌が、「現人神」に向かって命を捧げるときの「自決の表象」を示すものとなり、しかもそこに「万葉的」な「愛＝献身」という美学が加算されたということなのだろう。

ともあれ、敗戦後の日本では、『万葉集』にあるような古代的な「海の文学」(藻塩や若海藻に象徴される)と、「太平洋戦争」という総力戦・消耗戦の拭い去りがたい記憶の重なりの上に、新しい「海洋文学」をめぐる模索が始まったというべきなのかもしれない。

3 「非主流海洋文学」

ただ、私が「海の文学」なるものについて、自分が、いかに長いあいだ、漫然とした問題意識をしか抱いていなかったか、しっかりと目を開かせて下さったのは、台湾の蘭嶼(島)出身の作家、シャマン・ラポガンさん(1957-)だった。

私が「シャマン・ラポガン」という同時代人の存在に底知れない力を感じたのは、日本で『台湾原住民文学選』(草風館)の刊行が始まり、『台湾原住民文学選2・故郷に生きる』(2003)のなかに、台湾の原住民でもパイワン系の血を引くリカラッ・アウーの短篇24編とともに収録されていたシャマン・ラポガンさんの『黒い胸びれ(黒色の翅膀)』に目を通した瞬間だった。その衝撃に、立命館大学文学部で担当していた「文芸方法論」という「クリエイティヴ・ライティング」系のクラスで、その作品の冒頭部分を教材に用いたほどだ。

トビウオがいくつも群れをなして、うみのそこここを真黒に染めあげていた。それぞれの群れは三、四百匹からなり、五、六十メートルずつ距離をおいて、約一海里にわたってつながっていて、まるで、軍規のきびしい大軍団が出陣するように見えた。トビウオの群れは黒潮の昔からの流れにのって、フィリピンのバタン諸島の北側の海に少しずつ近づきつつあった¹⁰。

月まで——』『マリ・クレール』97号、中央公論社、1990)。

⁸ 丸山隆司『海ゆかば——万葉と近代——』(アヴァン札幌、2011)、p.251。

⁹ 丸山隆司『海ゆかば——万葉と近代——』(アヴァン札幌、2011)、p.253。(初出は『国文学雑誌』81号、2009)。

¹⁰ 魚住悦子編訳『台湾原住民文学選2・故郷に生きる』(草風館、2003)、p.157。

しかし、『黒い胸びれ』を読むことで目が覚めたような感覚を味わったとしたら、それは人間が魚たちと生活圏を共有している場、それは人間が魚を捕獲する場ではあるとしても、その経験を通して、人間と魚とのあいだに「ふれあい」が生まれる場でもあるのだということを思い知る絶好の機会となったからだった。

これは人間が書き記した「動物文学」のひとつとしても出色だと感じた。それが、私とシャマン・ラポガンさんとの最初の出会だった。

そして、2016年の夏、こんどはシャマン・ラポガンさんと直接にお目にかかる機会が到来した。

2016年7月、植民地文化学会の年次大会初日の《フォーラム〈内なる植民地主義三たび〉》にパネリストとしてお招きしたシャマン・ラポガンさんは、「内なる植民地という新しき／古き苦境」と題したスピーチのなかで、氏の生れ故郷である蘭嶼が原子力発電所の核廃棄物の処理施設を押しつけられている現状から始め、「植民地主義」が中心による周辺の、マジョリティによるマイノリティの「馴致＝家畜化^{ドメスティケート}」のシステムであるという結論に向けて、力のこもった話を聞かせてくださった。「蘭嶼島は、1895年に日本の植民地になり、1945年に中華民国の植民地と帰した。私たちは国際政治の舞台のうえで、「訳の分からぬまま」被植民の身分へ位置付けられ、植民者による政治史観に服従することに茫然とし、私たちの宇宙観は錯乱したままである」¹¹というわけである。

そして、話はこれだけでは終わらなかった。大会の二日目には、「私の文学作品と海——非主流海洋文学」と題したシャマン・ラポガンさんの講演も企画されていたからだ。

「物語」というものは、私たちは幼い頃から大人たち、即ち父母・家族・社会から「創られ」「編まれ」て、聞かされてきた。この地球上には大小さまざまな民族が存在しているが、民族の数ほど異なる「物語」がある。しかし、大航海時代、即ち西洋人の称した地球大発見の時代、植民された弱小民族の本来所有していた優雅で美しい伝説や物語は、植民者によって踏みつぶされたり隅に置かれたりして、次第に荒唐無稽な「非主流文学」と化してしまったのである¹²。

「非主流文学」とは、「暗文学」（日蔭の文学?）という中国語にあてられた訳語のようだが、シャマン・ラポガンさんは、コンラッドやヘミングウェイ、それどころか『オデュッセイア』まで遡ることができる「西洋海洋文学」の古典に対する「カウンター」を試みておられるという強い自己主張を試みられたのだった。書き上げられたばかりの『大海浮夢』（2014）¹³にまつわるお話も味わい深いものであった。

¹¹ シャマン・ラポガン「内なる植民という新しき／古き苦境」明田川聡士訳（『植民地文化研究』第16号、植民地文化学会、2017）、p.29.

¹² シャマン・ラポガン「私の文学作品と海非主流海洋文学」趙夢雲訳（前掲『植民地文化研究』第16号）、p.205.

¹³ 同書は、『大海に生きる夢』下村作次郎訳として2017年に草風館から日本語訳も刊行され、2018年には「第五回鉄犬ヘテロトピア文学賞」の受賞作ともなった。

そして、この講演の後、私と、もう一人、批評家の岡和田晃さんの二人が司会者からコメントを求められたのだが、私はポーランド文学研究者だという自己紹介に絡め、おそらくは「海洋文学」の「主流」に属するのだろうジョーゼフ・コンラッドに触れ、そして逆に「主流」からは外れるだろう例として、1992年にノーベル文学賞を受賞したカリブの英語詩人、デレク・ウォルコット(1930-2017)の長篇叙事詩『オメーロス』(1990)の冒頭部分(「日が昇るころ、こうやってカヌーを切り倒したものだ」This is how, one sunrise, we cut down them canoes¹⁴)を想起しながら、その名前も挙げた。講演のなかで、シャマン・ラポガンさんは「故郷」への思いを次のように語られていたからだ——「故郷は海での潜水と漁を学ばせ、故郷はまた熱帯雨林の造船用の木材を与え、一族の男たち、また島の漁師たちは、私が忘れかけていた島と島人を教えてくれた。」¹⁵

もっともウォルコットは、過去の「カヌー作り」(canoeという言葉は先住アラワク族の言葉だった)をふり返り、それこそカメラを構えて記念写真を残そうとする観光客の前で、その伝統の技を示そうとしている(それで収入を得ようとしている)島民のことをうたっている¹⁶のだが、シャマン・ラポガンさんは、もっとストレートに、みずからを育んだ島の「伝統」を引き継ごうとされている。

短篇集『冷海情深』(1992)に収められた「黒潮の親子舟」のなかには、主人公に向かって年老いた父親が、こんなことを言う場面もある——「わしは十年以上も待っていたんじやが、舟がない家は、男がない家と同じじや。」¹⁷

そして、二人は山に登って、木を切り出し、中をくりぬいて舟を拵える——「孫の父親、この木は山ピンロウ、あれはムクイヌビワ、あれはランショセキナンじや……。どれも舟を造る木だ。このヤマピンロウはおまえを十年余りも待っていたんだぞ。舟の中央の両側にはめ込む上等の材料だ。この種の木は、いちばん腐りにくいんじや。この木はバンリュウガンだ、今日、わしらが切り出す竜骨じや……」¹⁸

はたして、『老人と海』*The Old Man and the Sea*(1952)の老人サンチアゴは、みずから山に入って舟を作ったりしたのだろうか。2016年7月の講演会で、私と岡和田さんのコメントを受けた応答のなかで、「ヘミングウェイの『老人と海』が、一種の征服者による技術中心主義的な文学と語られていた」ことは、私もそう記憶しているし、岡和田さんが文字化された「コメント」のなかにもそう記録されている¹⁹。

「海洋文学」の「主流」は、海を戦場、あるいは交易のために踏破すべきスペースに変えた戦士たちではなく、海を生活圏とする「海洋民族＝海人」の手に渡すべきではないだ

¹⁴ Walcott, Derek. *Omeros*, (faber and faber, 2000), p.3.

¹⁵ 前掲『植民地文化研究』第16号, p.210.

¹⁶ ジャメイカ・キンケイド(1949-)の『小さな場所』*A Small Place*(1988)は、グローバル化とツーリズムによって荒廃する離島を批判的な角度から描き出した、今ではポストコロニアル文学の「古典」だと言ってもよい(日本語訳は、旦敬介訳, 平凡社, 1997)。

¹⁷ 『冷海情深』魚住悦子訳(草風館, 2014), pp.44-45.

¹⁸ 『冷海情深』魚住悦子訳(草風館, 2014), p.48.

¹⁹ 岡和田晃「自然と人間の融合」(前掲『植民地文化研究』第16号), p.216.

ろうか。私がそこで強く感じたのは、そのことだった。

4 大航海時代以前

ところで、地図(図1)からも分かるように、オーストロネシア系言語の分布は、東はイースター島、西は何とマダガスカル島まで伸びている。

【図1】オーストロネシア語族の人的・言語的拡散

<https://www.peuplesdumonde.voyagesaventures.com/groupe-austronesien/172-austronesie.html>

マダガスカルの場合は、アフリカ大陸からの移住者も少なくなかったため、その言語にはバントゥー語の影響もあるようだが、しかし系統的にはオーストロネシア系に属するとのこと。台湾(フォルモサ島)以南の海洋民族が、いかに太平洋とインド洋を股にかけたかが分かる。

いわゆる四大文明は地続きでつながっていたし、ユーラシア大陸の東西交易は、シルクロードという陸路を用いたという説があまりにも有力であるため、「海上の道」という発想が出てくるのは、それこそ近代に入ってからで、しかもそれはコロンブス以降の大航海時代の果たした役割が大きすぎて、古代人の海洋進出に目が向けられることは少なかったのだ。その意味では、比較言語学が果たした役割には測り知れないものがある。

そういえば、鄭和(1371-1434)の大航海については、華語世界では誰でもが知っていることだし、日本が遣隋使(初回600年)・遣唐使(630-838)、これに並行して遣新羅使(668-836)を派遣するようになった時代、東アジア海域における交易は、殷賑をきわめ

るに至ったと思われるが、金重明(1956-)の『皐の民』(2000)には、新羅王でさえもが目置いた張保皐(790?-846?)の全盛期が描かれている。

838年の最後の遣唐使派遣団に加わった円仁(794-864、『入唐求法巡礼行記』を残している)は、入唐後、なかなか思うように修行をつめずにいたのだが、山東省あたりの新羅人社会の手を借りることによって目的を達成できた(帰国は847年、その後、下野国の出身であったこともあるのだろうが、東日本をまわって、松島の瑞巖寺、浅草の浅草寺などは、円仁が開山した)。この円仁と、新羅の商人たち、そして張保皐という伝説的な人物を登場させた歴史巨編としての『皐の民』には、何と獅子国(スリランカ)の女船長や、ペルシャ人の商人までが登場する。

「はるばる長江河口の寧波から[現在は山東省の]赤山、耽羅(済州島)、[現在は全羅南道の]莞島を経由してきた交易船が鷄林[唐が新羅の金城＝現在の慶州に置いた州督府の名]に着いた」²⁰というところを読んだだけでも驚いたのだが、「張保皐は[中略]夕日を眺めながら、末羅遊[マラユ＝スマトラ島東部の国]の女、アハーラの舞を思いおこしていた」だの、「アハーラの舞は、張保皐に波斯[ハシ＝ペルシャのこと]の女、スジャータを思い出させた」、そして「アハーラとスジャータが似ていたわけではない。アハーラの肌は黄褐色で、スジャータの肌は抜けるように白かった」²¹といったところまで来ると、ある種の妄想かとさえ思ったのだが、しかし、ペルシャ人のアブーは、「バグダードより西の世界を直接見分したことはない」とはいえ、「知識として知って」はいて、「イベリア半島西端[ロカ岬?]から日本の東端[犬吠埼?]までの距離を想像」²²するという楽しみを味わえるほどの「識者」だったのだ。

西洋中心の歴史観に染まってしまうと、ヨーロッパとアジアが出会ったのは、ヴァスコ・ダ・ガマ(1460?-1524)やフェルディナンド・マジェラン(1480-1521)以降だと思ってしまいがちだが、シルクロードを介した陸路に留まらず、海路を通じて、人と人は行きかい、物流はとぎれることなく、そして知もまた交換されつつあったのだ。

そして、そうしたインド洋と太平洋を介した「海上の道」を最初に切り拓いたのは、オーストロネシア系の言語を話す「遠洋航海者」だったのだということである。

シャマン・ラボガンさんの文学は、中国語で書かれてはいるが、それは「華語文学」のうちに封じこめられるものではなく、まさに「オーストロネシア文学」の最前線を担うものである。そして、何よりも『大海に生きる夢』は、まさにそうした自覚に沿って書かれたものだと言ってよいだろう。

華麗島の南東に浮かぶ蘭嶼に生を享けた一人の現代人が、仲間を求めて、太平洋をさすらい、はてはクック諸島のラロトンガ島にまで足を延ばす。帝国にも国民国家にも縛

²⁰ 金重明『皐の民』(講談社, 2000), p.39.

²¹ 金重明『皐の民』(講談社, 2000), p.141.

²² 金重明『皐の民』(講談社, 2000), p.164.

られない、それこそみずからの原点をさぐる移動の旅がそこではなぞられている。

5 津島佑子の挑戦

それでは、こうしたシャマン・ラポガンさんの野心的な「世界文学」の企てに肩を並べられるような文学が日本語でも書かれているとしたら、それは何だろうか?講演「私の文学作品と海——非主流海洋文学」を拝聴して以降、ことあるごとに私が考えるようになったのは、そのことだった。

船戸与一(1944-2015)の『蝦夷地別件』(1995)は、ハードボイルドタッチの歴史小説で、川越宗一(1978-)の『熱源』(2019)も、そうした日本語文学の新しい潮流の上に位置していると見るができるだろう。

しかし、さしあたって特筆すべきは、亡くなられたということでは船戸与一の場合もそうだが、この間、同じく相次いで他界された津島佑子さんと石牟礼道子さん、この二人の女性作家ではないか。「海の文学」をこれまで牽引してきたのが男性たちであればあっただけ、女性作家(大平マホさんの分身とも言えるのかもしれない)たちの挑戦には注意を向けておく必要があるだろう。

まず、津島佑子さんは、20世紀の終わりから、「文学キャラバン」なる作家のグループを組織して、アジア諸国の作家たちとの交流を積極的に進められた津島佑子さん(1947-2016)である。津島さんと台湾ということで言えば、『あまりに野蛮な』(2008)が有名だが、これは2005年に実施された「日台キャラバン」から生まれた作品だと言っても過言ではないだろう²³。この「日台キャラバン」は、リービ英雄さん(1950-)が、ほぼ半世紀ぶりに台湾の地に足を踏み入れ、後の『模範郷』(2016)が書かれる原点に置かれてしかるべきなのが、このときの台東訪問だった。そして台東で企画された「座談会」には、まさにシャマン・ラポガンさんが、台湾の「原住民作家」を代表する一人として参加しておられたのだった。

そして、そこでは結婚相手の台湾赴任に付き従う形で、台北に移り住んだ内地日本人女性を主人公の一人に据えた「植民地文学」のスタイルを試みた津島さんは、その後、引揚者を扱った『葦舟、飛んだ』(2009-2010に連載)などを書いたのち、満を持して書かれたのが『ジャッカ・ドフニ』(2015に連載)で、それは海を股に掛けた17世紀女性の南洋行(マツマエからツガルを経て、マカオ、そしてバタビアまで)の物語だ。

西太平洋を北緯41度から南緯6度まで南下した女性。津島さんが、そこで念頭に置いていたのは、むしろ「じゃがたら文」のことだっただろう。

「じゃがたら文」で知られる「お春」(1625年にイタリア人を父とするハーフとして長崎に生まれ、14歳で、母姉とともに国外に追放され、バタビアでオランダ人を父とする

²³ 『すばる』2006年4月号(集英社)の[特集：日台作家キャラバン]を参照。

同じくハーフの男性と結婚。祖国を想う気持ちを和歌混じりの文に認めて、長崎に送ったものが、残されている)を念頭に置いた「書き換え」になっていることは、誰もが気づくところだろう。

「じゃがたら文」は、「千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐や。まだ宵月の空もうちくもり、しぐれとともにふる里を出しその日をかぎりとなし、又ふみも見じあし原の、浦路はるかにへだたれど、かよう心のおくれねば／おもひやる やまとの道のはるけきも／ゆめにまちかくこえぬ夜ぞなき」と始まり、「あら日本恋しやゆかしや、見たや見たや見たや」と締めくくられる²⁴。

唐への留学を経験した安倍仲磨(698-770)の「あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」(『古今和歌集』「巻九」)を下敷きにした、自由な、そして庶民的な変奏だと言いたくなるような作品である(これを『土左日記』の紀貫之は、この歌の冒頭を、状況に合わせて「あをうなばら(＝青海原)」と書き換えていた)²⁵。

これに対して、『ジャッカ・ドフニ』の主人公の場合は、蝦夷地のマツマエで和人を父として生まれ、アイヌのハボ(母親)に育てられた記憶は、ほんとうにわずかな記憶にすぎなかったが、脳裏に深く刻みこまれた子守唄(「ルルル、ロロロロロ、モコロ、シント、ランラン、ホーチブ、ホーチブ!」²⁶)と、和名では「チカ」である名前が、アイヌ語では「鳥」という意味の「チカッパ」だという知識と、このふたつだけでも彼女のアイヌとしてのアイデンティティを規定するには十分なものだった。

ただ、自分で和歌が詠め、手紙も書けたお春とは違って、チカッパは文字が書けないので、「兄しゃま」として慕うジュリアンに宛てた手紙も「代筆」²⁷だという設定になっていて、時折、「代筆者よりひとこと」として「ほそく」²⁸がなされていたりする。

そんなチカッパのバタビアからの遠い声は、たとえば、こんなふうだ。

兄しゃま、こちらにきてから、チカッパはきりしたんのいみがわからなくなつとります。ほんで、なまいきにもそいでかまわんのやっちゅう思いもあります。チカッパがいくらかんがえたところで、わかるはずはなか、わかろうとおもうしかくもチカッパにはなか、そんげんおもわれるとです。

はんぶんアイヌのこのチカッパには、きりしたんについて、ではのうて、アイヌについての、なんちゅうか、せきにんがあるんやないか、とかんじとるんよ。

兄しゃま、チカッパはまちごうとるんか。

マリアさまはチカッパのハボです。けんど、ほんまのチカッパのハボは、マリアしゃまを知りません。パラインに行けたかどうかわかりません。マリアしゃまとハボをくらべるこつはできん。じゃけん、ハボのために、チカッパはマリア

²⁴ 西川如見『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』飯島忠夫・西川忠幸(校訂)(岩波文庫、1942)、pp.231-237。

²⁵ 紀貫之『土左日記』(岩波文庫、1979)、p.35。

²⁶ 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社、2016)、p.66。

²⁷ 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社、2016)、p.361。

²⁸ 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社、2016)、p.408。

しゃまにいのりつづけます。すると、あもるの思いが海のように、チカップのからだをひたしとるのがかんじられます。

すくなくともこのバタビアには、チカップいいに、ひとりもアイヌはおらん。そいは、たいへんなこつや。きりしたんとしてよりも、アイヌのおなごとして、チカップは生きとうよ。そいが、チカップのねがいや。

兄しゃまはわかってくれるよね²⁹。

そして、彼女が北の国から来る便りのなかで、彼女が何より気にかけたのは「えぞ地でえぞ人のおおきかはらんがあった」³⁰という報せだった。1669年のシャクシャインの戦いの噂だ。じゃがたらお春は、もっぱらみずからも経験した島原の乱(1637-38)の記憶に苦しめられているのだが、そこがチカップの場合は、やはり「アイヌ」であることの意味が大きかった。

そして、代筆をつとめたバタビアの日本女性是这样子に書いている——「島びとにたいしかなりざんこなふるまいをするコンパニーのオランダ人たちですら、このはなしをつたえきいたとき、おどろきあきれとりました。」³¹

じつは、同じ時期、ここに登場するバタビアのオランダ人たちが、ゼーランディア城を拠点にして、現在の台南周辺を制圧していたわけだから、このチカップの物語は台湾の歴史ともまったく無縁ではなかった。

チカップは手紙のなかで、こうも語っている——「フォルモサ島に二万五千もの海ぞくの軍ぜいがおしよせてきて、……／しばらくおしつおされつのじょうたいがつづいとりましたが、／けっきょく、コンパニーはようけぎせいしやをだしただけでのうて、……／あの島をうばいとられてしまいました」³²と。

帝国日本の南進論の背景に、山田長政の栄光の記憶があったように、現代中国の「一带一路」構想は、鄭和の大航海者の偉業をことあるごとに参照することで国民の夢を養いつづけているのだろう。

しかし、そうした勇ましく、商魂たくましい男たちの「海の物語」に対する一種の「カウンター」として、『ジャッカ・ドフニ』は、それこそ山崎朋子(1932-2018)の『サンダカン八番娼館』(1972)や、森崎和江(1927-)の『からゆきさん』(1976)のような「底辺女性」の「海の物語」を掘り起し、再創造するという、「聞き書き」ならではの作業を、小説という形を使って引き受けようとした、女性作家ならではの現代文学の創作実験なのだと思う。

²⁹ 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社, 2016), p.370.

³⁰ 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社, 2016), p.416.

³¹ 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社, 2016), p.417.

³² 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』(集英社, 2016), pp.413-414.

6 石牟礼道子と「海の文学」

そして、海を越えて郷里を棄てたのは、男ばかりでなかったことを示し、しかもそれは「からゆきさん」や「従軍慰安婦」の経験の「可視化」という時代の流れに応えるものであったという形で『ジャッカ・ドフニ』の特徴をとらえるなら、「漁撈民の文学」こそが「海の文学」の原点に据えられるべきだというシャマン・ラボガンさんの立ち位置にもつながる形で、しかも女性が書く「海の文学」の形を鮮烈な形で示した石牟礼道子(1969-2004)の『苦海浄土』に触れないわけにはいかないだろう。

シャマン・ラボガンの文学では、どこか「男の世界」という独特の香りがあるのだが、『苦海浄土』に描かれる水俣の漁民らは、男も女も子供も、だれもが舟に乗って海の上で、ひとつの時間を過ごす。

うちは三つ子のころから舟の上で育っただけん、ここらはわが庭のごたとばい。それにあんた、エベスさまは女ごを乗せとる舟にや情けの深かちゅうでっしょ。[中略]

舟の上はほんによかった。

イカ奴は素っ気^めのうて、揚げるとすぐにぷうぷう墨をふきかけよるばってん、あのタコは、タコ奴はほんにもぞかとばい。

壺ば揚ぐるでしょうが。足ばちゃんと壺の底に踏んばって上目使うて、いつまでも出てこん。こら、おまや舟にあがったら出ておるもんじゃ、早う出てけえ。出てこんかい、ちゅうてもなかなか出てこん。壺の底をかんかん叩いても駄々こねて。仕方なしに手網^{たび}の柄で尻をかかえてやると、出たが最後、その逃げ足の早さ早さ。ようも八本足のもつれもせずに良う交して、つうつう走りよる。こっちも舟がひっくり返るくらいに追っかけて、やっと籠におさめてまた舟をやりおる。また籠を出てきよって籠の屋根にかしこまって坐^いとる。こら、おまやもううち家の舟にあがってからはうち家の者じゃけん、ちゃあんと入とれちゅうと、よそむくような目つきして、すねてあまえるとじゃけん。

わが食^いう魚にも海のものにも煩惱^{ぼんぷ}のわく。あのころはほんによかった³³。

「自分が口にする魚にも煩惱がわく」——まさに魚とおなじ生息圏に暮らす人間だけがいだきうる、しみじみとした感傷である。

かかよい、飯炊^{まき}け、おるが刺身とる。ちゅうわけで、かかは米とぐ海の水で。

沖のうつくしか潮で炊いた米の飯の、どげんうまかもんか、あねさんあんた食うたことのあるかな。そりゃ、うもうござすばい、ほんのり色のついて。かすかな潮の風味のして。

33 『[池澤夏樹＝個人編集]世界文学全集III-04：苦海浄土』(河出書房新社、2011)、p.87.(第一部の「ゆき女きき書」より)

かかは飯炊く、わしゃ魚ばこしらえる。わが釣った魚のうちから、いちばん気に入ったやつは鱗ばはいでふなばたの潮でちゃぶちやおう洗うて。[中略]鱗ばはいで腹をとって、まな板も包丁もふなばたの水で洗えば、それから先は洗うちゃならん。骨から離して三枚にした先は沖の潮でも、洗えば味は無かごとになってしまうとでござす。

そこで鯛の刺身を山盛りに盛り上げて、飯の蒸るあいだに、かかさま、いっちょ、やろうかいちゅうて、まず、かかにさす。

あねさん、魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんを、ただで、わが要と思うしことって、その日を暮らす³⁴。

漁村においては、海は女性としての感受性のなかにも深く浸透していく大自然のエレメントなのだ。

じつは、津島佑子は、台湾を舞台にした『あまりに野蛮な』(2008)の後半部分で、台湾人慰安婦の過去を掘り起こしているが、この箇所注目した私は、次のように書いて、私なりの「『あまりに野蛮な』論」を締めくくった——「日本人男性の身勝手さをめぐる話であれば、原住民女性を現地妻にしてひとり日本に帰国していった日本人巡査のほか数々のバージョンがある。女の「膣」だけを利用したつもりの男が女の「子宮」や「乳房」をまで冒すことになるかもしれないという想像力を働かせないまま、結果的に子どもの生死にまつわる喜怒哀楽のすべてを女性におしつけてしまうという家父長制の暴力性が、植民地においてはいっそう強化されてしまった。」³⁵

しかし、これは、石牟礼さんの『苦海浄土』のなかで、長いあいだ、活字になることがないまま、2004年になってから、『石牟礼道子全集<不知火>』(藤原書店)の第一巻配本として、第一部・第三部とともに一冊にまとめられた「第二部・神々の村」のなかに見つけた一節が、知らない間に、私に乗り移ったような表現だった気が今はしている。

戦場でたて続けに何百人もの兵隊を相手にせねばならぬ性とはそもそもなんだろう。そういう経験を持つ女性が、命ながらえて帰った果てに、水俣病を病んでいるのだった。

もしも、あるがままの自然というものが人類に残されるとすれば、最後の神秘として性は残るはずだった。胎児性患者を生まねばならなかった母親たちも、太初からそうであったように、魚を養う海の潮とおなじ羊水を、その胎に湧かせていたのである。女の胎と海とが、おなじ潮であることを人びとはまだ十分に思いつかない。そこに直接毒が注入されたことと「日本の性の現実」とは、たぶんふかい関わりがあるのにちがいがなかった。慰安婦の傷痕をとどめた女身であろうとも、いやそれであればなおのこと、僅かの余生を浄福してくれる相手を得て、もとの海への光につつまれながら、終ることができたらうに³⁶。

³⁴ 『池澤夏樹＝個人編集』世界文学全集III-04：苦海浄土』(河出書房新社、2011)、p.123。(第一部の「天の魚」より)。

³⁵ 西成彦『外地巡礼』(みすず書房、2018)、p.210。

いったんは妊娠しながら、流すことになってしまった子、生れ落ちながらも長くは生きられなかった子——津島佑子が、自身の経験を踏まえながら、現代女性作家として生涯引き受けようとしたのは、そうした「羊水」をくぐらせた文学の追求だった。そして、そうした「羊水」と「海水」の通底性(「女の胎と海とが、おなじ潮である」)という着想こそが、石牟礼道子から津島佑子へと引き継がれた「海の文学」のひとつの水脈だったのだ。

7 おわりに

「海洋冒険小説」という「海の文学」の「主流」だったものが退けてきた「非主流」の文学の担い手として期待されるのは、まさに海を生活圏とする「海人」たちであり、かりに「海人」の慣習のなかで周縁化されてしまうことがあったとしても、それでも海との関係を損ねたときには、人間としての命をも損ねることになると確信すらしている漁村の、男以上に女たちである。

西洋文学に「海洋文学」の系譜を見出そうとすれば、『オデュッセイア』*Ὀδυσσεύς* から『ロビンソン・クルーソー』*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*(1719)を経て、『白鯨』*Moby-Dick*(1851)、『海底二万里』*Vingt mille lieues sous les mers*(1870)、『青春』*Youth*(1898)、『老人と海』あたりまで、女人禁制の閉鎖空間を生きる男たち(船員や商人)を焦点化したものがもっぱら主流で、漁民を扱ったものは皆無に近い。

また日本文学を掘り起こしても「海に生きる者」に対する関心は、一方で葉山嘉樹(1894-1945)のようなプロレタリア文学の系譜(そこにも女性の影はない)か、あとは宮本常一(1907-1981)以降の「民俗学」の系譜しかみあたらない。

そうしたなかで、とくに日本においては女性作家の台頭がめざましい。今後は、この「海の文学」をめぐる研究を東アジア全域にも開いていくことができれば幸いである。

参考文献(Bibliography)

- 石牟礼道子(2011)『[池澤夏樹＝個人編集]世界文学全集III-04：苦海浄土』、東京：河出書房新社。Ishimure, Michiko(2011) *Sekai Bungaku Zenshu III-04 Kugaijodo*, ed. by Ikezawa, Natsuki, Tokyo : Kawadeshobo-shinsha.
- 魚住悦子[編訳](2003)『台湾原住民文学選2・故郷に生きる』、東京：草風館。Uozumi, Etsuko(ed.) (2003) *Taiwan*

36 『[池澤夏樹＝個人編集]世界文学全集III-04：苦海浄土』(河出書房新社, 2011), p.340.(第二部の「花ぐるま」より)。

- Genjumin Bungaku-sen 2, Kokyoni Ikiru*. Tokyo : Sofu-kan.
- 金重明(2000)『阜の民』, 東京 : 講談社. Kim, JungNyeong(2000) *Migiwano Tami*. Tokyo : Kodan-sha.
- 金田一京助[採集並びに訳](1936)『アイヌ叙事詩／ユーカラ』, 東京 : 岩波文庫. Kindaichi, Kyosuke (collection and translation) (1936) *Ainu Jojishi, Yukar*. Tokyo : Iwanami-shoten.
- 岡和田晃(2017)「自然と人間の融合」『植民地文化研究』第16号, pp.216-217. Okawada, Akira (2017) Shizento Ningen-no Yugo, *Shokuminchi Bunka Kenkyu*, Vol. 16, pp.216-217.
- 島尾ミホ(1987)『海辺の生と死』, 東京 : 中公文庫. Shimao, Miho (2017) *Umibeno Seito Shi*, Tokyo : Chuo-koron-sha.
- 島尾敏雄・ミホ(2017)『愛の往復書簡』, 東京 : 中公選書. Shimao, Toshio and Miho (2017) *Aino Ofuku Shokan*, Tokyo : Chuo-koron-sha.
- シャマン・ラポガン(2014)『冷海深情』魚住悦子訳, 東京 : 草風館. Shaman, Rapogan (2014) *Reikai Sinjo*, trans. Uozumi, Etsuko, Tokyo : Sofu-sha.
- シャマン・ラポガン(2017a)「内なる植民という新しき／古き苦境」明田川聡士訳, 東京 : 『植民地文化研究』16号, pp.24-29. Shaman, Rapogan (2017a) Uchi-naru shokumintoiu Atarashiki/Furuki kukyo, trans. Aketagawa, Satoshi, Tokyo : *Shokuminchi Bunka Kenkyu*, Vol. 16, pp.24-29.
- シャマン・ラポガン(2017b)「私の文学作品と海・非主流海洋文学」趙夢雲訳, 東京 : 『植民地文化研究』16号, pp.205-213. Shaman, Rapogan (2017b) Watashino Bungaku Sakuhinto umi, Hi-shuryu Kaiyo-bungaku, trans. Chou, Muun, Tokyo : *Shokuminchi Bunka Kenkyu*, Vol. 16, pp.205-213.
- シャマン・ラポガン(2017c)『大海に生きる夢』下村作次郎訳, 草風館. Shaman, Rapogan (2017c) *Taikaini Ikiru Yume*, trans. Shimomura, Sakujiro, Tokyo : Sofu-kan.
- 知里幸恵[編訳](1923)『アイヌ神謡集』, 東京 : 郷土研究社. Chiri, Yukie (1923) *Ainu Shinyo-shu*, Tokyo : Kyodo Shuppan-sha.
- 津島佑子(2016)『ジャッカ・ドフニ／海の記憶の物語』, 東京 : 集英社. Tsushima, Yuko (2016) *Jakka Dofuni*, Tokyo : Shuei-sha.
- 西成彦(2018)『外地巡礼／「越境的」日本語文学論』, 東京 : みすず書房. Nishi, Masahiko (2018) *Gaichi Junrei*, Tokyo : Misuzu Shobo.
- 西川如見(1942)『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』飯島忠夫・西川忠幸(校訂), 東京 : 岩波文庫. Nishikawa, Joken (1942) *Chonin Bukuro, hyakusho Bukuro and Nagasaki Yobanashigusa*, Tokyo : Iwanami Shoten.
- 丸山隆司(2002)『『アイヌ学』の誕生—金田一と知里と—』, 東京 : 彩流社. Maruyama, Takashi (2002) *"Ainu-gaku" no Tanjo, Kindaichi-to Chiri-to*, Tokyo : Sairyu-sha.
- 丸山隆司(2005)「「大日本帝国」への「行路」——『暗夜行路』をめぐる——」『国文学雑誌』72号, 札幌 : 藤女子大学国語国文学会, pp.95-111. Maruyama, Takashi (2005) "Dainihon Teikoku"-heno "Koro", *An'ya Koro-wo megutte, Kokubungaku Zasshi*, Vol. 72, Sapporo : Fuji Joshi Daigaku Kokugo Kokubun Gakkai, pp.95-111.
- 丸山隆司(2009)「「海ゆかば」——万葉の〈近代〉——Ⅳ」『国文学雑誌』81号, 札幌 : 藤女子大学国語国文学会, pp.11-56. Maruyama, Takashi (2009) "Umi Yukaba", *Manyo-no Kindai (IV), Kokubungaku Zasshi*, Vol. 81, Sapporo : Fuji Joshi Daigaku Kokugo Kokubun Gakkai, pp.11-56.
- 丸山隆司(2011)『海ゆかば——万葉と近代——』アヴァン札幌. Maruyama, Takashi (2011) *Umi Yukaba, Manyo-to Kindai*, Sapporo : Avan Sapporo.
- 丸山隆司(2012)「短歌と異族—台湾—」『国文学雑誌』87号, pp.31-51. Maruyama, Takashi (2012) "Umi Yukaba", *Manyo-no Kindai (IV), Kokubungaku Zasshi*, Vol. 87, Sapporo : Fuji Joshi Daigaku Kokugo Kokubun Gakkai, pp.31-51.
- 丸山隆司(2015)「霧社蜂起事件」をめぐる言説(ディスコース)(1)」『国文学雑誌』91-92号, pp.30-40. Maruyama, Takashi (2015) "Umi Yukaba", *Manyo-no Kindai (IV), Kokubungaku Zasshi*, Vol.91-92, Sapporo : Fuji Joshi Daigaku Kokugo Kokubun Gakkai, pp.30-40.
- Walcott, Derek (2000) *Omeros*. London-Boston : faber and faber.